# あすの留萌に夢をかけた先覚者たち

## "留萌の昔を語る座談会" その陰に涙と笑いの秘話

中川　通さん

／ご出席のみなさん

原田　太八
笹島喜一郎
福田宇之助
伊藤為四郎
五十嵐マツ

司会　中川　通

原田　太八さん

笹島喜一郎さん

福田宇之助さん

伊藤為四郎さん

五十嵐マツさん

〈司会〉　わたくしは、市史編さんの仕事を担当している関係から、きょうの司会役となりましたが、まあわたくしは時間係りみたいなもので、大体よい所へ来たら次の話題に移るというようなものと思っています（笑声）どうぞ、よろしくお願いします。

では、まずお正月でもありますから、昔のお正月についてお話をしていただきたいと思います。　まあ、年代は明治の三十年代から昭和の終戦ころまでということにしましょう。

### 《お正月》

## 楽しみはホービキ

〈伊藤さん〉　正月というものは、昔は一週間くらいの食べ物を作ったもんでなかったですか。

〈原田さん〉　まあ、一週間も半月もの食べ物を作ったものでした。

〈福田さん〉　お正月のかざりも大変なものでしたね松かざりなど四、五mのト（ド）松をマキでこうまいて（手まねをして）大きくなわでまいたものでした。

大きな商店や料理屋など昔の大家は皆そうしたものでした。大きなのが自慢でね。

〈笹島さん〉　わたくしたちの方は（農村）餅をついてお祝いし、学校へ皆集まって年賀をしたものです。

それから帰ると、家ごとに知り合いの所へ年始に歩るきました。お互いにそうしたものです。

そうすると、きょうはわたくしの所へ来てくれというと付近の人が集まって一杯やると、その次にまたどこの家に行くとー、それだけが農家の人たちの楽しみでした。

〈福田さん〉　まち（市街地）では、紋つき着てね、名刺を持って歩るいたんです。

〈五十嵐さん〉　わたくしの家は漁師でしたが、十二月の二十日過ぎますと、すず払いし、松向いというものに行ったものですの。松を切るのに…。

そして、松向いして来てからは、漁師、舟のり、バクチ打ちといって縁起をかつぐもんですから、わたしら子どもの時は、母親に、縁起の悪るいことでも言ったら、キリッとにらみつけられるんです。それがおっかなくてねー。

松向いしたら、もうお正月が来たと思えと言われたものです。

〈司会者〉　それは大体何日位前ですか。

〈五十嵐さん〉　大体二十五日。船頭さんとか出入りの人たちが山へ松向いに行くんです。

それで、松向いのときは酒のさかなをこしらえて、松をチャンとかざり、松向いして来た人たちに一杯のましてお祝いしたものです

〈司会者〉　なにかやるとお酒でー。

〈五十嵐さん〉　なんでもお酒です。

〈司会者〉　年始で歩るいたら一杯出すもんですか。

〈五十嵐さん〉　えゝ、もうみんなベロベロになるほど飲んだものです。

〈司会者〉　おやじさんは一杯のんで良いお正月ですが、女や子どもたちはどうしてました。

〈五十嵐さん〉　漁師でしたら、正月が来ると忙がしくて嫌だと言ったものです

女中でもお母さんでも、そういうのです。

それは、お客さんが来るからですよ。

お客さんが来て、すぐ料理が出るように、すい物から何から全部こしらえておくんですね。

そして、一週間分でも十五日位までの分でもね。

〈司会者〉　なにか、お正月には見るものなんか小屋がけしたものですか。

〈五十嵐さん〉　わたしら子どもの頃は、オモチャ屋とか店もなかった時ですから、子どもはホービキをして遊んだもんです。

アゾ（網に使う綿糸）で

も、ひもでも、その先に穴のあいた銭を一つつけるんです。

穴のあいたお金のついたひもを引っぱる。当った人にはお金をやるのです。

オモチャで遊ぶこともないし、正月に馬コといってお年玉をもらうんです。

そうして、きょうはどこあしたはどこというように友達の家をまわり歩るいてもらうんです。

そのお金でホービキをしたりー。

〈伊藤さん〉　その当時お年玉は、十銭なんかなかったんです。十銭はネコの眼といって、普通は一銭か二銭でした。

〈司会者〉農村なんかでもホービキやったものですか

〈原田さん〉　あ、、ヤッタ、ヤッタ

〈福田さん〉　わたくしのところでは、当時の名士が集まってやったものですがランプの石油がなくなると提灯つけてまでやったものでしたよ。

〈司会者〉　それは一銭位でなく、少し高かったのじゃないですか。

〈福田さん〉　やっぱり、少し高かった（笑声）五銭から十銭位でした。

〈伊藤さん〉　その当時、十人位集まると、サァー、ホービキでもやるかとすぐ相談がまとまり…（笑声）

〈一同〉　その当時としては、随分おもしろかったです。

〈司会者〉　女だけの遊びはー

〈五十嵐さん〉　羽子板なんか、吹雪でとても出来ませんでした。

ですから家の中で、友達の家をかわるがわるまわって歩るいて、家の中で遊びました。

その頃、二日の初売りはなかなかにぎやかでした。

朝早く、寝ているうちから、馬を飾り、ガンガンをたたいて…。そして馬にのってる人がみんな酒によっぱらっているので、それを見るのがおもしろかったです。

みんなねぢりはちまきして、景気をつけたもんです

〈司会者〉　農村の方で正月の餅は、自分で作った米でついたものですか。

〈原田さん〉　その当時は餅米なんかほとんどなく、二升位にあとはイナキビで餅を作ったものです。

大体今のように水田がなかったですから、餅米は買ったものです。

### 《風俗》

## ゴム靴は高嶺の花

〈司会者〉　女の髪、持ち物、はきものであるとか、家の造りなんかどうでしたか。

〈伊藤さん〉　二階建なんかほとんど少なかったね。

〈福田さん〉　その頃の店は、タタミに火鉢。ストーブなんか全然ありませんでした。

〈司会者〉　むかしは街でも雪が多く、向いの店が見えなかったと聞きますが…

〈福田さん〉　もう全然見えなかった。

〈五十嵐さん〉　漁家は長い炉で、根ッコをすき、それにマキを立てかけ燃やしたものです。

それで煙は空窓というものをつけ、ヒモを引っぱると窓があき、煙はそこから出るという仕かけのものでした。

また、炉の上の方には、物を乾すために棚をつけてわらじなどを乾したものでした。

〈司会者〉　それは何年頃ですか。

〈五十嵐さん〉　明治の終り頃です。

〈司会者〉　女の服装とか髪とかは、どんなものでした。

〈五十嵐さん〉　女の子は親から頭の真中を刈ってもらい、これはノボセないためのものでしょうね。

そしてハカマはかして学校へつれてくれるんです。

わたくしは北紀念通りで生まれましたが、今は内港になっている所です。

そして、その頃は橋があって、橋を渡って街に出るのです。

あの頃の小学校は、いま電報電話局建設中のところ

そして、高等科になると今の留萌小学校のところに通ったもんです。

〈司会者〉　髪のかたちなんかどうだったんですか、

〈五十嵐さん〉　三年生頃まではオカッパでした。

古城のお父さんは、とても髪結いが上手でした。

〈司会者〉　男がですか？

〈五十嵐さん〉　そうですとても上手でしたよ。

〈福田さん〉　たけなが（髪のかざり）というのは、佐藤先生が当時留萌女子職業学校の第一回の校長だったがその頃までたけながの髪で行きましたよ。

〈五十嵐さん〉　そしてだんだん髪を長くして、桃割れというものを結って行くのですよ。

そしてたけながをかけるのです。

だんだんかみが長くなって行けば、その家々の親がいろんなかっこうで結ってくれたものです。

〈司会者〉　おかみさん達はみんな丸まげだったんですか。

〈五十嵐さん〉　そうです、お母さん方には、みな髪結いさん達が廻ってあるくのです。四日に一回とかというふうに…。

福田さんのお母さん、いつでも丸まげでしたね。

〈司会者〉　着物なんかどうでした。たとえばモンペとか…。

〈五十嵐さん〉　モンペなんか知りません。

学校へあがったらハカマでした。ふだんは木綿のハカマで、エビ茶か紫かの色